



地元の子どもの研究発表。未永く森を守っていくために、子どもたちの自然への理解を深めることが大切だ



プランテーションで行われた水質調査。地元の村の人たちは、身近な自然を守ることに熱心だ

PLAYERS

国際協力の担い手たち

酪農学園大学

自然を守るには 足元の環境から

パーム油の主要産地の一つ、マレーシアのボルネオ島では、アブラヤシの畑が広がり続け、地域にすむ生物に大きな影響が出ている。酪農学園大学は、地域住民たちと共に、自然と生活を守るための活動を展開中だ。



クアラルンプール

生き物を追いつめるアブラヤシ 地元の経済にも影を落とす

私たちがおやつに食べるスナック菓子やアイスクリームの多くには、材料としてパーム油が使われている。今や、私たちの食生活になくてはならない存在だが、生産地ではアブラヤシを植えるために森が切り開かれ、周囲の動物たちを脅かしている。「ボルネオ島は、100年前には島全体が熱帯雨林で覆われていましたが、現在、森が残っているのは、保護区とその周辺や川沿いだけです」と、酪農学園大学の金子正美教授は語る。



野生動物のモニタリングをしたところ、貴重なウンビョウが見つかった



星の画像を使って森林の状況を診断する森林リモートセンシングなどの研修も実施してきた。

今回のプロジェクトでは、KOPELを中心、キナバタンガン川が属するサバ州の野生生物局や森林局、国立のサバ大学などが全面的に協力している。また、日本からも酪農学園大学の教員たちをはじめ、NPO法人エンヴィジョン環境保全事務所や旭川市旭山動物園が現地での技術指導を行った。

地元住民の自然への思い 海を越えて受け止める

KOPELのスタッフの多くは専門知識を持っていないが、野生動物や水質、森林などの専門家と共に調査活動に取り組み、熱心に指導を受けた。「指導の際は、やり方だけでなく、なぜその調査が必要なのか、調査地をどう選ぶのかなども教え、将来は自分たちで調査を計画・実行できるように工夫しました」と、現地に駐在する同大学の小菅千絵特任研究員は言う。

「動物や水質など、自分たちの身の回りの自然については、彼らの関心がとても高かったのです。プロジェクトの調査が森林認証につながったことに加え、KOPELも観光関係のさまざまな賞を受賞しました。政府機関やサバ大学の学生の研修先になるなど、予想以上に注目されています」



自然の大切さを伝えるための環境教育プログラムにも取り組んでいる

また、ワークショップを通してKOPELの主要メンバーが商品開発を学び、地元にも埋もれていた素材を積極的に掘り出した。小学生や中高生など、子ども向けの環境教育プログラムを企画する際も、現地調整員がKOPELのスタッフと共に試行錯誤を重ねた。「観光組織のスタッフといっても、その素顔は地元のお父さんやお母さん、若者たちです。私や学生たちが彼らの家を訪れると、片言の英語やジェスチャーで歓迎してくれます」と金子教授。現在、プロジェクトを進める上で一

番の課題は、現地の治安だ。海岸沿いの地域では12年から現在まで、外務省の渡航中止勧告が発令されている。現地での直接指導が難しくなったため、電話やメールなどで連絡を取ったり、州都のコタキナバルにスタッフを呼んだりして協力を続けてきた。また、13年度から3年間、KOPELのスタッフを北海道に呼び、モニタリング活動や情報センターを実際に見てもらった。治安の悪化が原因で観光客が激減し、KOPELの運営も困難になってきた。

しかし、持続可能な開発目標(SDGs)を踏まえれば、この地域の自然を守ることは重要だ。そこで、状況を改善するため、国連大学に「持続可能な開発のための教育に関する地域の拠点(RCE)」のキナタタンガンへの設立を申請している。「北海道で申請したRCEは、昨年、認可されました。キナバタンのRCEが認可されれば、これからも力を合わせて取り組んでいきます」と金子教授は訴える。

生物多様性というと、種の絶滅など地球レベルの課題が真っ先に思い浮かぶが、それは地域における問題が発端となることが多い。法律や条約で動物や自然を守る規制を敷くとともに、地元の人々の生活を向上させ、生物多様性保全の重要性を理解してもらうことが大切だ。地球を守るには、まず地域から。酪農学園大学とバトゥプティ村の住民は、足元の課題に地道に取り組んでいる。

種のゾウやオランウータンにとって、川沿いや一部の保護区の森が最後の生息地となっている。ここは他にも、テングザルやウンビョウ、スローロリス、メガネザルなど、貴重な絶滅危惧種を含む数多くの動物が生息する豊かな森だ。

アブラヤシ農園の拡大で地元の森が減っていくことに危機感を抱いた住民たちが、地域の自然と自分たちの生活を守るため、1997年、観光組合KOPELを立ち上げた。KOPELはホームステイやポートサービス、文化体験、環境保全などを手掛け、海外から訪れる観光客の宿泊や観光ツアーなどを手配・管理している。

酪農学園大学は2006年から年1、2回、KOPELを立ち上げた村の一つ、バトゥプティ村で海外実習を行ってきた。学生たちもここで卒業論文や修士論文の研究を行う中で、環境や地域経済の悪化に気付いていた。そんな折、バトゥプティ村の住人から協力を求められ、住民参加型の村おこしに取り組みることになった。

北海道江別市に酪農学園大学の前身となる北海道酪農義塾を設立した黒澤西蔵は、「神を愛し、人を愛し、土を愛する」という三愛精神の下、貧困な農民のために尽力した。学生の国際活動も活発で、青年海外協力隊員も数多く輩出している。開発途上国から研修員を受け入れ、生物多様性を保全するための地理情報システム技術や、人工衛